

寄稿



大阪を襲った地震と津波—大阪の地震津波石碑『大地震両川口津浪記』—

全科履修生 長尾 武

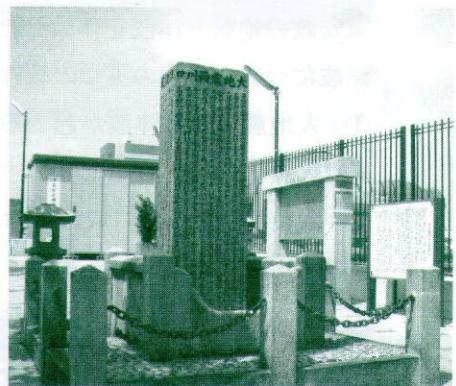
私は2006年、放送大学に入学いたしました。当時、大阪市内の学校に勤務しておりましたが、大阪学習センターが自宅から近いこともあり、休日や勤務が早く終わった日には、必ず学習センターのパソコン室に出かけていました。大阪を襲った津波についての研究を一冊の本として発表しようとしていたからです。その年の2年前の2004年暮れ、インド洋大津波の様子がテレビの映像で映し出され、初めて津波の恐ろしさを実感し、大阪を襲った津波（安政南海地震津波）について、調査を始めたのです。その後、現在も研究を続けて、私の第二の人生のライフワークのようになっています。拙著『水都大阪を襲った津波—石碑は次の南海地震を警告している』も、東日本大震災の影響を踏まえて、昨年4月に、3回目の改訂をいたしました。今回、「みおつくし」に寄稿する機会をいただき、大阪の先人が体験し、私たちに伝えてくださった南海地震と津波の教訓について、ご紹介いたします。

大阪は過去に何度も、南海地震による大津波に襲われ、大きな被害を受けています。1854年の安政南海地震津波の教訓を刻んだ『大地震両川口津浪記石碑』が、JR大阪環状線大正駅の北東約300m、木津川に架かる大正橋の東詰にあります（写真と地図）。石碑の高さは約2mで、長年の風雨に耐えて、どっしりとした存在感は、道行く人々の注意を引きます。石碑正面には、南無阿弥陀佛の名号と南無妙法蓮華経の題目が記され、東面と南面には『大地震両川口津浪記』の文章が細かい文字で全面にわたって記されています。

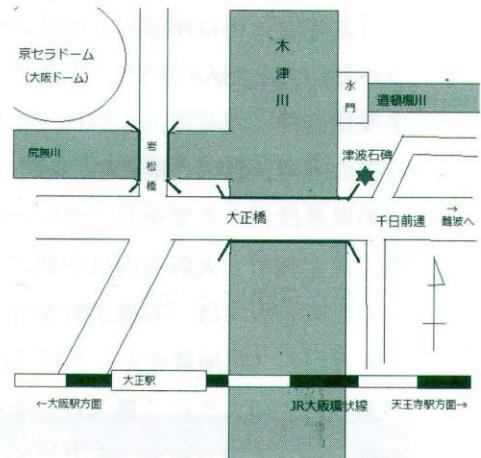
私の地震・津波研究は、この石碑を読むことから始まりました。『大地震両川口津浪記』の本文について説明します。

嘉永7年（この年11月27日に安政と改元）6月14日深夜（西暦1854.7.9）に起きた伊賀上野地震から始まり、その後起きた二つの大地震と津波について述べています。伊賀上野地震は現在の三重県上野市や奈良市周辺に大きな被害を与えました。大阪では潰れた家や死者は無かったが、人々は大きな揺れと繰り返し起こる余震に驚き、家に居られず、大通りや川端に佇み、4、5日間眠れない夜を過ごしたのであった。その余震もおさまった5ヶ月後の11月4日（西暦1854.12.23）、さらに大きな揺れ（安政東海地震）に襲われ、うち続く余震におびえた人々は、空き地に避難小屋を建てたり、堀川の川船に逃れました。翌5日申刻（午後4時頃）また、大きな揺れ（安政南海地震）が襲った。家が崩れ、出火もあり、恐ろしい様子であった。

さらに、日暮れ頃、雷のような響きとともに、津波が押し寄せたのです。安治川、木津川の両川口では山のような大波が立ち、泥水は上流に位置する東横堀川まで入り込み、そこでは水位が120cmばかり上昇した。安治川口、木津川口には多数の船が碇泊していたが、津波によって碇綱を打ち切られて、一



【写真】大地震両川口津浪記石碑



大地震両川口津浪記石碑へのご案内

位置 大阪市浪速区幸町3丁目、大正橋東詰。

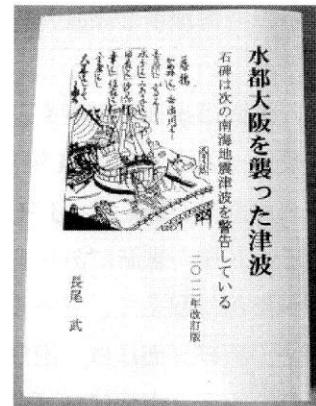
JR大阪環状線・大正駅下車、北東へ徒歩約5分。

気に上流へ押し上げられ、大阪の市街地に架けられた多数の橋を次々に突き崩したのです。往来に溢れた水に慌てた人々は逃げ惑い、橋から落ちる者もあった。道頓堀川では4つの橋が落ち、大黒橋でようやく止まった。そこでは大船が横倒しになって塞ぎ、下流から次々に押し上げられた多数の船が小舟を下敷きに重なり合った。道頓堀川や木津川では壊れた船が川面全体に山のようになった。大船が河川沿いの建物に舳先を突っ込んで突き崩した。その現場に遭遇した人々の恐怖について、次のように描写している。「川岸の納屋等を大船が押崩し、その物音、人の叫ぶ声々、急な出来事で、助けることが出来なかつた」とあり、人々の叫び声が聞こえてくるようで、恐ろしい情景が目に浮かぶのである。船場や島之内まで津波がやって来るという噂も流れ、上町の高台をめざして逃げていく人々も見られた。

碑文は地震と津波の恐ろしさ、人々の対応について詳しく述べているが、さらに続けて、147年前の宝永地震津波（1707年）について思い起こしている。この時も、大地震が起きて、多くの人々が小舟に逃れたが、その後襲ってきた津波によって溺死したと聞いている。しかし、年月が経てば、伝え聞く人もほとんど無くなり、今、また、同じ場所で多くの人々が亡くなった。今後もまた、同様の災害が起こるであろうと予感しているのである。

安政の地震と津波を体験した大阪の人々は、後世の人々のために、大地震と津波についての次の五つの教訓を残している。

- ① 大地震の時は津波が起こると心得て、絶対に船に乗ってはいけない。
- ② 火災に気を付けること。
- ③ お金や証文は藏に収めておくこと。
- ④ 河川に停泊している船は、水勢の穏やかな所に繋ぎかえる。また、囲い船（北前船のように冬期に休んでいる船）は高い所に引揚げておくこと。
- ⑤ 海辺の新田では、泥水が大量に吹き上ることがある。



【写真】長尾氏の著書

五つの教訓の中でも、⑤は地盤の液状化が発生したことについて記述している。当時、人家も少なかった新田地帯で、この現象に注目し、後世の人々に警告していることは、碑文中でも特筆すべきです。

『大地震両川口津浪記』の最後の一行には、「願くば心あらん人、年々文字読みやすきよう、墨を入れうべし。」と刻んでいる。安政の大地震と大津波を体験した大阪の人々は、教訓を百年の歳月にも耐えるように石碑に刻んだ。しかし、たとえ石に刻んでも、時が経てば、忘れられ、顧みられなくなってしまう。石碑の維持、教訓の継承を心ある人に託したのでした。安政二年（1855）の建碑から158年、今では木津川の風景は大きく変化し、幸町の住民も変わりましたが、石碑は地域の人々によって守られてきました。第二次大戦で、大阪市内は空襲によって焼け野原となりましたが、幸町は辛うじて免れ、石碑も無事でした。幸町の人々は「石碑が町を守ってくれた」と話されています。『大地震両川口津浪記』石碑は、幸町の人々から「お地蔵さん」と呼ばれて、大切にされています。毎年、8月の地蔵盆には、石碑を洗い、文字が読みやすいように「墨入れ」を行い、地域の人々が集まって供養が行われています。建立の精神が世代を越えて受け継がれているのです。平成19年（2007）4月、『大地震両川口津浪記石碑』は大阪市指定有形文化財に指定されました。みなさん、ぜひ一度、この石碑を訪れてみて下さい。

長尾 武さんのプロフィール

2006年春、放送大学に入学。歴史地震研究会会員、日本地震学会会員。論文：「1854年、安政南海地震津波、大阪への伝播時間と津波遡上高」（『歴史地震』23号、2008年）他。著書、『水都大阪を襲つた津波』自費出版（2013年改訂版）他。